

平成22年 6月 4日現在

研究種目：基盤研究（B）海外学術調査  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19401041  
 研究課題名（和文） 会話と手話の相互行為分析に基づくマダガスカル言語文化の共通構造と差異の比較研究  
 研究課題名（英文） A Comparative Study of Unity and Diversity of Malagasy Culture-Language on an interaction analysis approach to Conversation and Sign Language  
 研究代表者  
 深澤 秀夫（FUKAZAWA HIDEO）  
 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授  
 研究者番号：10183922

研究成果の概要（和文）：国語にも指定されているマダガスカル語とマダガスカルのろう者たちが用いる手話の会話場面を臨地調査によって収集・記録し分析した結果、マダガスカル語の動詞の態の選択、語順の選択、主語の単数/複数の選択の頻度を会話場面毎に計測することによってそこに内在する行為主体の志向の強弱を判定し、マダガスカルの人びとの文化の共通性と多様性を測定することが可能であるとの見通しを得た。その一方、マダガスカル語とマダガスカル手話とは、挨拶の定型性、同時発話の頻度、動詞の態の種類をめぐり明らかな違いが認められ、その要因についてはさらなる調査が必要である。

研究成果の概要（英文）：The malagasy conversation data and the malagasy sign language data which have been collected on our field-work researches from 2007 to 2009, these data reveal us that it may be possible to clarify unity and diversity of malagasy culture-language, if we count the frequency of choice of voice, the frequency of choice of word order and the frequency of choice of singular form/plural form which concerns the nominative pronoun in certain contexts of malagasy conversation acts and malgasy sign language acts. However, there still remain the open questions what cause the dissimilarities between malagasy speech acts and malagasy sign language acts on the points of phatic communion, speech chain and voice.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
年度			
年度			
総計	8,800,000	2,640,000	11,440,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学 相互行為分析 マダガスカル マダガスカル語 会話 手話 言語文化 比較対照研究

1. 研究開始当初の背景

| 研究代表者の深澤秀夫は1983年から、

マダガスカル北西部の稲作—牛牧民ツィミヘティ (Tsimihety) の人びとの社会人類学的調査と研究に従事してきた。研究分担者の箕浦信勝は2004年から、首都アンタナナリヴの聾学校を中心に言語学の視点からマダガスカル手話とマダガスカル語との関係についての調査研究に従事してきた。また、研究分担者の飯田卓は1994年から、マダガスカル南西部の漁撈民ヴェズ (Vezo) の人びとの生態人類学的調査と研究に従事してきた。そのため、本研究を開始した2007時点において、深澤はマダガスカル語北西部方言について、箕浦はマダガスカル手話について、飯田はマダガスカル語南西部方言について、通訳などを介さずに当該方言や手話の使用者と直接意志の疎通を図ることができた。

無人島であったマダガスカル島に人間が継続的に居住を始めたのは、およそ5世紀～8世紀以降であり、16世紀からの大航海時代以前の人類の移動史上、最も近年になって居住を始めた地域の一つである。最初にマダガスカル島に定住すると共に10世紀頃まで人口上の多数派を形成したのは、インド洋を渡ってやって来た、インドネシア系の言語と文化を持った人びとであったと推測されている。そのため、現在マダガスカル共和国の国語であり、マダガスカル島に居住する圧倒的多数の住人が母語としているマダガスカル語は、オーストロネシア語族へスペロネシア語派に属している。さらに、物質文化、農耕、葬制などの面においても、インドネシア系の人びとの影響が強く認められる。

その一方、マダガスカル語には5つほどの方言群の存在が指摘されており、人種的形質が極めて多様であることと共に、その文化にも地域および民族毎の多様性が顕著に見られる。すなわち、マダガスカルの文化は、マダガスカル語と各方言との関係に見られるように、共通性と多様性が並存していると多くの先行研究者たちによって指摘されているのである。しかしながら、マダガスカルの全ての地域と民族に共通する文化要素ないし文化項目の抽出は現実には困難であり、文化の共通性は、マダガスカル語の共通性を援用した仮定の域ないし証明されない経験的感想に留まってきたと言えよう。

このようなマダガスカルをめぐる地域研究の現状の一方、文化/社会人類学を含む人文・社会科学においては1990年代後半から、機能主義や構造主義、システム論などのマクロな視点のアプローチに対し、現象学およびエスノメソドロジーに端を発する会話行動の微視的分析である「会話分析」が一定の立場を確立し、海外ではその専門誌も発刊され、分析事例も飛躍的に増加していった。けれども、「会話分析」に基づいた個別事例

の研究が積み重ねられ、またその分析方法は精緻化されていったものの、分析された結果としての「社会」ないし「文化」を超えてさらにそれらを比較・対照する研究の試みは、ほとんどなされてこなかった。

これまでのマダガスカルにおける実地調査を通して培われた深澤・箕浦・飯田の現地会話や手話の能力を統合的に運用し一つの研究としてまとめる上で、マダガスカル語と「会話分析」を含む相互行為分析はまたない領域を成すものと予期された。なぜならば、相互理解可能なマダガスカル語の各方言の部分で相互行為分析を実施するならば、そこで個別に得られる相互行為に含まれる「志向性」は、未だに仮定の域に留まっているマダガスカル文化における共通性の存在を具体的に検証することを可能ならしめる比較・対照事例となるからにほかならない。

## 2. 研究の目的

①マダガスカル語の方言および手話に関する文化/社会的脈絡をできるだけ克明に記した「会話」事例を採録・収集し、方言研究および手話研究における事例を提供する。

②マダガスカル語の方言および手話の個別事例に含まれる相互行為の「志向性」を抽出し、各方言と各地域手話の特質を明らかにする。

③未だに証明されていないマダガスカル文化の共通性と多様性の相関を、各方言と各地域の手話に内在する「志向性」の点から検証する。

④マダガスカル語会話とマダガスカル手話との間の連続性/不連続性を、これまでの文法的側面だけではなく話者の「志向性」の視点から検証する。

⑤会話分析—相互行為分析の手法が、個別の社会的脈絡の抽出に有効なだけでなく、比較・対照研究にも適用できるか否か、検証する。

## 3. 研究の方法

マダガスカル現地において、複数の地域と複数の民族を選択し、そこにおける異なる社会的脈絡における発話/手話の状況をICレコーダー/画像記録装置によって採録し、音声と画像の資料を収集した。会話行動や手話行動の採録状況は、被験者同士の自由な会話場面に参与した場合もあれば、一定の会話主題や会話状況を想定して被験者に語ってもらったりあるいは手話を用いてもらった場合もある。このようにして採録された資料の解読について、必要な場合には、マダガスカル現地協力者による翻訳や説明の支援を受けた。本研究は、これらの資料を個別に会話分析—相互行為分析の手法に基づいて分析すると共に、その結果を複数の視点から比較

対照させることによって、マダガスカルの言語—文化の共通性と多様性について検討した。

各研究分担者が本科学研究において資料を採録した期間と地域は、下記の通りである。

①深澤秀夫：2007年7月27日～同年10月8日 Majunga 市内および Befandriana と Antsohihy 地方、2008年3月2日～同年3月24日 Majunga 市内および Antananarivo 市内、2008年7月25日～同年9月30日 Majunga 市内および Befandriana と Antsohihy 地方、2009年2月19日～同年3月26日 Majunga 市内および Antananarivo 市内、2009年7月27日～同年9月28日 Majunga 市内および Befandriana と Antsohihy 地方、2010年2月18日～同年3月22日 Majunga 市内および Antananarivo 市内。

②箕浦信勝：2007年8月7日～同年9月3日 Antananarivo 市内および Majunga 市内、2008年8月9日～同年9月5日 Antananarivo 市内および Majunga 市内、2009年8月21日～同年9月6日 Antananarivo 市内。

③飯田 卓：2007年7月30日～同年9月4日 Antananarivo 市内、Toliara 地方、Fianarantsoa 地方、Tamatave 地方、Diego-Suarez 地方、Majunga 地方。2009年1月13日～同年2月25日 Toliara 市内および Morombe 地方、2010年1月14日～同年2月18日 Toliara 市内および Morombe 地方。

上記の現地調査によって、次のような比較・対照軸を持つと予想される一定数の資料を収集・採録することができた；健常者のマダガスカル語会話/聾者のマダガスカル手話、男性の会話/女性の会話、年長者の会話/若年者の会話、都市居住者の会話/農村居住者の会話、漁撈民の会話/水田稲作民の会話/商人の会話、日常会話/儀礼言語、マダガスカル Antananarivo 市内手話/マダガスカル Majunga 市内手話、Merina/Vezo/Tsimihety (民族)。

#### 4. 研究成果

①マダガスカル語会話における志向性の判定基準：

①-A 動詞の「態」に基づく志向性：マダガスカル語動詞には、3つの「態」(voice)が存在する。

能動態：Mihinam-bary aho. 「私は、ご飯を食べます」

受動態：Haniko ny vary. 「私によって、ご飯が食べられます」

関係態：Tany amin'ny hotely no nihinanako ny vary. 「私がお飯を食べたのは、

あそこの食堂です」

これらのマダガスカル語における三つの動詞の「態」を、その発話における発話者自身の志向性の強弱ないし明示度から分類すると、能動態>受動態>関係態の順になる。オーストロネシア語族に特有な、時間・場所・手段などを主語とする関係態が、最も志向性の弱い「態」になることは当然としても、マダガスカル語の場合、日本語やヨーロッパ系言語と比べ、受動態を多用する特徴が存在する。マダガスカル語における受動態は、能動態における目的語を作用主として設定した「態」と言うよりも、動作主の志向性をことさら強調する必要の無い場合に用いられる平叙文と考えることが適切である。それゆえ、能動態>受動態の順列がとりわけ有意であり、同じ条件下の発話では、両者の使用頻度が志向性の判定基準となる。

①-B 語順に基づく志向性：マダガスカル語において志向性の強い能動態には、さらに三つの語順が存在する。

Mihinam-bary aho. 「私は、ご飯を食べます」

Izaho dia mihinam-bary. 「私は、ご飯を食べます」

Izaho no mihinam-bary. 「私が、ご飯を食べます」

第一の文型は動詞+目的語+主語、第二の文型は主語+動詞+目的語、第三の文型は主語+助詞+動詞+目的語の語順である。第一の文型は、「私は」と言う主語の行為主体よりも、「食べる」と言う能動態動詞の行為そのものが強調されており、この三つの文型の中では一番志向性が弱い。第二の文型は、第一の文型と逆に、同じ能動態動詞を使った文型であるにもかかわらず、主語が文頭に置かれることによって、「食べる」と言う行為よりも、主語としての「私は」と言う行為主体に強調が置かれている。第三の文型は、ヨーロッパ系言語における強調構文、日本語であれば「が」の格助詞の用法に類似しており、主語の「私が」の行為主体に強調が置かれていることは明白である。以上より、同じ能動態動詞を用いた文型でも、第三の文型(主語を文頭に置いた上、主語を強調する助詞の挿入する文型)>第二の文型(主語を文頭に置く文型)>第一の文型(主語を文末に置く文型)の順に志向性の強弱が存在する。

①-C 一人称主格の単数/複数に基づく志向性：マダガスカル語の名詞には、単数/複数の別が無く、「これ」、「これら」の指示詞の付加によって単複を表すしかない。しかしながら、人称代名詞には、一人称・二人称・三人称の何れについても単数/複数の別が存在する。①-Bにおいて、同じ能動態動詞を用いても、主語(動作主)の置かれる位置と助詞の使用/不使用によって、志向性の強弱に

差のあることを指摘したが、さらに、主語の動作主、とりわけ一人称について単数を用いるのか、複数を用いるのかによって、そこには志向性の強弱に差が生じる。

Izaho no manampy anao. 「私が、あなたを助けます」

Izahay no manampy anareo. 「私たちが、あなたたちを助けます」

二つの文例とも、①-Bにおける最も志向性の強い第三の文型を用いている。文法的に二つの文例の違いは、動作主と目的語が単数であるか複数であるかに過ぎない。しかしながら、志向性の点から見たこれらの文例の違いは、単数/複数をめぐる事実関係の問題ではなく、話者が単数形を用いることによって作用主と目的語に置かれた対象双方を強度に限定している第一の文例と話者が複数形を用いることによって作用主と対象双方をやや曖昧にしている第二の文例の違いとして、すなわち志向性をめぐる主張の強弱として有意化することができる。

以上より、マダガスカル語の志向性の強弱の並びは、強い順に下記のようにまとめられる。

- a. 一人称単数を文頭に置き強調の助詞を加えた能動態構文。
- b. 一人称複数を文頭に置き強調の助詞を加えた能動態構文。
- c. 一人称単数を文頭に置いた能動態構文。
- d. 一人称複数を文頭に置いた能動態構文。
- e. 一人称単数を文末に置いた能動態構文。
- f. 一人称複数を文末に置いた能動態構文。
- g. 作用主を一人称単数とする受動態構文。
- h. 作用主を一人称複数とする受動態構文。
- i. 関係態構文。

方言によっては、この9つの構文全てを用いているわけではないことが今回の調査からも追認されている。しかしながら、この9つの構文とその志向性の順列を設定し、ある特定の会話におけるそれぞれの構文の頻出度を計測することによって、マダガスカル語全方言における志向性判定を行うことが可能となつたとの見通しを得ることができた。

②志向性の強い会話場面の共通性－挨拶行動と儀礼的言語－：現在まだ収集した会話・手話資料について、予想しうる全ての比較・対照軸の点から志向性をめぐる分析を完了させたわけではない。しかしながら、志向性の視点から、マダガスカル文化における共通性の存在を示す可能性を持つ会話場面を抽出することができた。それが、挨拶行動と儀礼行動の脈絡における会話と発話である。

②-A 挨拶行動：マダガスカル語の挨拶行動には、地域と民族によって、用いられる語彙や単語の点で顕著な違いが存在する。しかしながら、そのやりとりと会話の展開には

地域や民族を超え極めて良く似たパターンが見出される。

- a. やり通りの対象性や反復性。
- b. 広義の「健康」・「健勝」をめぐる問いかけの存在。
- c. 広義の「新しいこと」・「出来事」・「変わり」をめぐる問いかけとそれに対する「無い」と言う否定の応答の存在。
- d. 対象性や反復性に基づく応答の後での、非形式的応答の展開。
- e. 能動態の多用。

その一方、志向性の視点からは、一人称単数/複数の頻度、「健康」・「健勝」をめぐる問いに対する応答における「良い」と言う形容詞の強調/非強調の点において、調査民族の間で顕著な差が認められた。今回の調査対象民族の中では、Tsimihety・Vezo>Merina の志向性の強弱が有意であった。

②-B 儀礼行動：神、祖先、霊に対する供犠や呼びかけの称詞を分析すると、地域や民族、あるいは称えごとを行う個人による個別の発話内容の違いを超えて、そこには共通のパターンが存在する。

- a. 能動態の多用。
  - b. 作用主の複数形の多用。
- 神・祖先・霊に対する供犠や呼びかけが、多くの場合、個人によってではなく、家族や親族などの集団を単位として行われるものであるならば、作用主が複数形によって表現されることは、けだし当然である。これに対し、能動態の多用は、日常会話において受動態を使用する頻度の高い民族においても認められ、儀礼的行動と言う脈絡が、地域や民族を超えて、神・祖先・霊などと、作用主の人間が対峙する場であることが共通に認識されていることを示している。

③マダガスカル語とマダガスカル手話の連続/不連続：

③-A 挨拶におけるマダガスカル語とマダガスカル手話の差異：マダガスカル語では、いわゆる「共感的やりとり」(phatic communion)としての挨拶が、ある程度定式化されている。A: “Manahoana ianao?” (いかがですか?) B: “Tsara fa misaotra” (良好です。ありがとうございます。) A: “Inona no vaovao?” (何が新しいですか?) B: “Tsy misy.” (新しいことはありません。) A: “Inona no maresaka?” (何が有名ですか?) B: “Tsy misy.” (有名なことはありません。) 実質的内容のある会話に入る前のこの「共感的やりとり」が、農村部では長めになり、都市部では短めになる。これに対し、マダガスカル手話の「共感的やりとり」は下記の通りである。ただし、手話の「記号表現」(signifiant)、即ち手指動作を表記することは煩雑になるため、マダガスカル語によるラベルで表記す

る。しかし、このことは、マダガスカル手話の単語とマダガスカル語の単語が、「記号内容 signifié (意味内容)」の点において、1対1で正確に対応するということを含意はしておらず、便宜的に類似なラベルを選んでいるか、あるいは、マダガスカルのろう者が、手話を発する際に付随させることがあるマダガスカル語「口形」(mouthing)から取ってきたものである。A: “MANAHOANA!” (やあ!) B: “MANAHOANA” (やあ!) A: “SALAMA, TOMPOKO?” (元気ですか、ご主人様?) B: “SALAMA, TOMPOKO.” (元気です、ご主人様。) 次にこう続きます。A: “INONA VAOVAO?” (何が新しいのですか?) マダガスカル語の場合には、“Inona no vaovao?” (何が新しいのですか?) と聞かれても、これは「共感的やりとり」なので、“Tsy misy” (新しいことはありません。) と答えることが決まりであるが、マダガスカル手話では、このやり取りの直前で「共感的やりとり」は終わっていて、実質的な「新しいこと」を答えることが期待されている。調査者は、生半可なマダガスカル語の知識から、マダガスカル手話でもいつも問いかけに対し“TSY.MISY” (何もありません。) と答えていたところ、ある日ろう者に、「お前はいつも『何も無い』って言ってるが、本当に何も無いのか?」と聞かれ、マダガスカル語の場合と異なり、マダガスカル手話の場合には、「新しいこと」を報告するのが決まりであることを新たに認識させられた。この手話特有の挨拶行動は、ビデオ収録したろう者同士の会話においても明瞭に観察することができる。

③-B 会話の重複発話におけるマダガスカル語とマダガスカル手話の差異: 音声言語の場合でも、会話の相手が話し終わる前に話し始めてしまう「重なり」が多い言語とそうでない言語が、社会言語学の談話分析などで報告されている。マダガスカル手話においては、会話者2人が「乗って」くると、2者がほとんどずっと「話しっぱなし」、つまり、双方の発話中重なりっぱなしな場合があることが観察された。手許にある、会話をビデオ収録したものの1つにおいて、最初の数分間は、2者が、順番取りに従って話していた。すなわち、片方が話し終わるのを待って、もう1人が話すという状況になっていた。しかし、最後の方においては、2者の同時発話が続き、それでも会話が成立していた。以上のことは、音声言語と手話言語の「発話連鎖」(speech chain)に関する相違によって説明することができる。「発話連鎖」とは、話し手がある考えを脳内で想起して、それが神経を伝って、音声器官で言語化され、言語化された音声は空気中を伝わり、聞き手の耳によって捉えられ、それが神経を伝って脳に

達し、意味として「解読」(decode)されるという一連のプロセスを指す。「発話連鎖」は、ソシュールが「線状性」と言う時の「線」とは違うものであるが、線的に連なっている。さらに、音声言語の場合には、話し手が、自分が発した音声を、骨伝導で自分の耳で聴き、話し相手の発話と同様のプロセスで神経から脳へと至らせ「解読」する「フィードバックの環」があることが報告されている。

一方、手話言語にも類似の「発話連鎖」があるが、細部において違いも存在する。手話言語の場合、話し手がある考えを脳内で想起して、それが神経を伝って手指(及び表情、姿勢など)で言語化され、言語化されたもの(この音声言語の「音声」の手話言語における対応物は、命名されていない。便宜的に「視覚刺激」としておく)が空気中を伝わり、聞き手の目によって捉えられ、それが神経を伝って脳に達し、意味として「解読」される。しかしながら、手話話者(ろう者)の場合、自分の手指動作等を、自分の目で捉える「フィードバックの環」は、音声言語の場合と同様には機能していない。それとは別なチャンネルが働いていると予想される、自分の手指等の筋肉等の動きが「身体感覚」としてフィードバックされることはありうるものと推測される。しかし、音声言語において、相手の発した音声と自分の発した音声が聴覚で合流して一緒に処理されるのに対し、手話言語においては、相手が発した視覚刺激が、自分の発した「フィードバックの環」としての視覚刺激と合流して処理されることがほとんど無いため、2者が同時発話を続けても、混線、混乱は生じない。

③-C 動詞の「態」をめぐるマダガスカル語とマダガスカル手話の差異: マダガスカル語には能動態、受動態、関係態、3つの「態」(ボイス)があるが、マダガスカル手話には、それらの3つの「態」は(ほとんど)引き継がれていない。手指動作に付随するマダガスカル語口形については、動詞はほとんど能動態が使われ、ごく少ない頻度で受動態が使用される。また関係態は全く用いられない。また手指動作に関して、それら3つの「態」が形態的に標示されることはなし。しかし、マダガスカル語の方で能動態が用いられず、受動態のみが用いられる動詞に対応するマダガスカル手話の動詞(TIA「好きだ」、TSY.FANTATRA「知らない」等)においては、動作主が「前接語」(enclitic)で表わされるという、マダガスカル語との類似が見られる。このように動詞の形態論による「態」の体系をマダガスカル語からほとんど受け継いでいないマダガスカル手話において、主題化・焦点化がどうなっているかは、まだ十分に解明されていない。恐らくは、語順(それもマダガスカル語とは少し異なる)と、表情、姿勢などの「非手指信号」(non-manual signals)で表わされると予想されるものの、現有のデータ上では

明らかではない。また、他国の手話言語においては PAM (person agreement marker)「人称一致標識」と呼ばれるものが動詞の前後などに置かれて、主題化・焦点化などにも関わることもあるが、そのしくみがマダガスカル手話そのものにあるのかについても、まだ明らかではない。マダガスカル手話における主題化・焦点化の問題は、今後の研究に託された課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 飯田卓 Canoes and Resource Management in Madagascar, 査読無し *Minpaku Anthropology Newsletter* No.28 2009, pp.39-42.
- ② 箕浦信勝 Word Order in Malagasy Language, 査読無し、『東京外国語大学論集』77号 47-69ページ

〔学会発表〕(計3件)

- ① 飯田卓「ローカルなもの終焉ー在地技術と文化伝承の相転移から見てー」日本文化人類学会第43回研究大会 2009年5月31日 大阪国際交流センター
- ② 箕浦信勝「マダガスカル手話の語順」日本手話学会第33回大会 2007年9月16日 日本社会事業大学
- ③ 飯田卓「無形資本としての技術・知識ーマダガスカル漁村の事例」日本文化人類学会第41回研究大会 2007年6月2日 名古屋大学

〔図書〕(計6件)

- ① 深澤秀夫、梶茂樹、砂野幸稔他共著 三元社『アフリカのことばと社会 多言語社会を生きるということ』2009年 419-453ページ
- ② 深澤秀夫、川田順造他共著 山川出版『世界各国史10 アフリカ史』2009年 152-201ページ
- ③ 飯田卓他共著 朝倉書店『朝倉世界地理講座 大地と人間の物語 12 アフリカ II バントゥアフリカ、西アフリカ沿岸、島嶼部』2008年 809-821ページ
- ④ 飯田卓、池谷和信他共著 明石書店『講座世界の先住民族 5 サハラ以南アフリカ』2008年 303-317ページ
- ⑤ 飯田卓 著 世界思想社『海を生きる技術と知識の民族誌ーマダガスカル漁撈民社会の生態人類学』2008年 全348ページ
- ⑥ 深澤秀夫、小川了他共著 弘文堂『資源人類学04 躍動する小生産物』2007年 183-242ページ

〔その他〕

ホームページ等

深澤秀夫

: <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

深澤 秀夫 (FUKAZAWA HIDEO)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：10183922

##### (2) 研究分担者

箕浦 信勝 (MINOURA NOBUKATSU) 総合国際学研究院・准教授

研究者番号：90262211

飯田 卓 (IIDA TAKU)

国立民族学博物館文化資源研究センター・准教授

研究者番号：30332191